

クンティボージャ (Kuntibhoja)

1章5節

クンティの養父。クンティ族の王。

アルジュナたちの外祖父的存在。

クンティボージャは、実の娘のようにクンティ（アルジュナのお母さん）を育て、王家としての教育を施した慈愛に満ちた人物。

彼は、“育てる愛”“託す覚悟”の象徴です。

彼がクンティを育てなければ、アルジュナも、パーンダヴァ五兄弟の物語も、始まらなかった。

シャイビヤ (Shaibya)

1章5節

有名な王家シャイビヤ族の出身。戦の王と称される。

聖王としての側面も持つ。命の価値を比べず、すべてを守ろうとした王。戦うより、守るために立ち続けた王者の魂。

伝説によると、シャイビヤ王 (Shibi) はある日、一羽の鳩が彼のもとに逃げてくるのを見た。

鳩を追ってきた鷹は、「私はこの鳩を食べなければ飢えて死ぬ」と主張する。

王は「鳩の命も、鷹の命も、どちらも守る」と言い、鳩の代わりに自らの肉を鷹に差し出す。

この“無私の行動”により、神々から賞賛され、「真のダルマ（義）を知る王」として称えられた。

ユダーマンユ (Yudhāmanyu)

1章6節

パーンダヴァ側の勇敢な戦士。パンチャーラ国（ドラウパディーの故郷）の王族出身。

役目は、戦場でアルジュナの防衛に当たること

戦場の“目立たないところ”で本質的な仕事をするタイプ。

「アルジュナを守る」ということは、クリシュナの御車を守るということでもあり、実は最重要任務。

ギターでは一言も語らないが、**その沈黙こそが“忠義の証”**であるような人物。

『マハーバーラタ』終盤、カルナとの戦いで戦死

ウッタマウジャス (Uttamaujās)

1章6節

ユダーマンユと同じく、パンチャーラの武将。ユダーマンユとペアでアルジュナの護衛を担当。

ユダーマンユと常にペアで語られる点からも、戦場では緊密な連携と信頼関係を持っていたと考えられる。

二人でアルジュナという「義の矢」を支え、背後を死守する役。

『マハーバーラタ』終盤、彼もまたカルナとの戦いで戦死。